

2020 (R2) 年度 新潟大学 前期 入学試験 数学解説

< 理 , 医 , 歯 , 工学部 >

(全 5 問で120分 , 4 問の場合90分)

- 1 四面体 OABC の辺 OA を $y : (1-y)$ に内分する点を D , 辺 AB を $(1-x) : x$ に内分する点を E , 辺 BC を $(1-y) : y$ に内分する点を F とする。ただし , x, y は $0 < x < 1, 0 < y < 1$ を満たすものとする。3 点 D , E , F を通る平面と直線 OC の交点を G とする。

$\overrightarrow{OA}=\vec{a}, \overrightarrow{OB}=\vec{b}, \overrightarrow{OC}=\vec{c}$ として , 次の問いに答よ。

- (1) ベクトル \overrightarrow{DE} および \overrightarrow{DF} を $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ および x, y を用いて表せ。
 (2) $\overrightarrow{OG} = t\vec{c}$ を満たす t の値を x を用いて表せ。
 (3) 辺の長さに関して , $OA = OB = OC, AB = BC = CA$ が成り立つとする。
 $OA = h, OA : AB = 1 : k$ として , 線分 EG の長さを最小にする x の値を k を用いて表せ。
 また , そのときの線分 EG の長さを h と k を用いて表せ。

< 解答 >

(1)

$$\overrightarrow{DE} = \overrightarrow{DA} + \overrightarrow{AE}$$

$$\overrightarrow{DA} = (1-y)\vec{a}, \overrightarrow{AE} = (1-x)\overrightarrow{AB} = (1-x)(\overrightarrow{AO} + \overrightarrow{OB}) = (1-x)(-\vec{a} + \vec{b})$$

$$\text{したがって, } \overrightarrow{DE} = (1-y)\vec{a} + (1-x)(-\vec{a} + \vec{b}) = (x-y)\vec{a} + (1-x)\vec{b} \quad (\text{答})$$

$$\overrightarrow{DF} = \overrightarrow{DO} + \overrightarrow{OC} + \overrightarrow{CF}$$

$$\overrightarrow{DO} = -y\vec{a}, \overrightarrow{CF} = y\overrightarrow{CB} = y(\overrightarrow{CO} + \overrightarrow{OB}) = y(-\vec{c} + \vec{b})$$

$$\text{したがって, } \overrightarrow{DF} = -y\vec{a} + \vec{c} + y(-\vec{c} + \vec{b}) = -y\vec{a} + y\vec{b} + (1-y)\vec{c} \quad (\text{答})$$

(2)

$\overrightarrow{DG} = u\overrightarrow{DE} + v\overrightarrow{DF}$ とおく。ただし u, v は実数

$$\overrightarrow{OG} = t\vec{c} = \overrightarrow{OD} + \overrightarrow{DG} = y\vec{a} + u\overrightarrow{DE} + v\overrightarrow{DF}$$

$$= y\vec{a} + u(x-y)\vec{a} + u(1-x)\vec{b} - vy\vec{a} + vy\vec{b} + v(1-y)\vec{c}$$

$$= \{y + u(x-y) - vy\}\vec{a} + \{u(1-x) + vy\}\vec{b} + v(1-y)\vec{c}$$

ベクトル $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ は同一平面にないから , 各ベクトルの係数について , 以下が成立する。

$$y + u(x-y) - vy = 0$$

$$u(1-x) + vy = 0$$

$$t = v(1-y)$$

$$, , \text{ から } t = 1-x \quad (\text{答})$$

(3)

$$\overrightarrow{EG} = \overrightarrow{ED} + \overrightarrow{DG} = -\overrightarrow{DE} + \overrightarrow{DO} + \overrightarrow{OG} = -\overrightarrow{DE} - \overrightarrow{OD} + \overrightarrow{OG}$$

$$= -\{(x-y)\vec{a} + (1-x)\vec{b}\} - y\vec{a} + (1-x)\vec{c} = -x\vec{a} - (1-x)\vec{b} + (1-x)\vec{c}$$

$$EG = |\vec{EG}| = \sqrt{|\vec{EG}|^2}$$

$$|\vec{EG}|^2 = \vec{EG} \cdot \vec{EG} = \{-x\vec{a} - (1-x)\vec{b} + (1-x)\vec{c}\} \cdot \{-x\vec{a} - (1-x)\vec{b} + (1-x)\vec{c}\}$$

ここで、 $\vec{a} \cdot \vec{a} = \vec{b} \cdot \vec{b} = \vec{c} \cdot \vec{c} = h^2$

$$\vec{a} \cdot \vec{b} = \vec{b} \cdot \vec{c} = \vec{c} \cdot \vec{a} = h^2 \cos \theta = \frac{h^2(2-k^2)}{2}, \text{ 余弦定理により } \cos \theta = \frac{h^2 + h^2 - (kh)^2}{2h^2} = \frac{2-k^2}{2}$$

を用いて計算し、整理すると

$$|\vec{EG}|^2 = \{x^2 + (1-x)^2 + (1-x)^2\}h^2 + 2\{x(1-x) - x(1-x) - (1-x)^2\} \frac{h^2(2-k^2)}{2}$$

$$= \{x^2 + (1-x)^2 k^2\} h^2 = \{(k^2+1)x^2 - 2k^2x + k^2\} h^2$$

$$= \{(k^2+1)x^2 - 2k^2x + k^2\} h^2 = \{(k^2+1)\left(x - \frac{k^2}{k^2+1}\right)^2 + \frac{k^2}{k^2+1}\} h^2$$

したがって、 $x = \frac{k^2}{k^2+1}$ (答) のとき、 $|\vec{EG}|^2$ は最小値 $\frac{h^2 k^2}{k^2+1}$ をとるから、

線分 EG の長さの最小値は $\frac{hk}{\sqrt{k^2+1}}$ (答)

< 解説 >

題意に沿って、図1のような図を手書きして考察を進める。正確な図である必要はないが、正確に近いほど、考察が容易となる。日頃から、問題に応じて図を手書きする習慣をつけよう。

(1)

できるだけ簡単なベクトルの合成によって、 \vec{DE} および \vec{DF} を表現することを考える。 \vec{DE} については三角形 ADE, \vec{DF} については四辺形 ODFC に着眼する。各辺を容易にベクトル表現することができるからである。

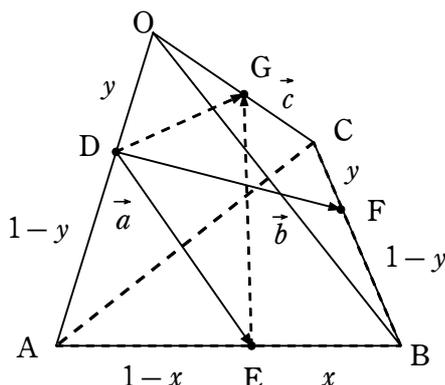


図1

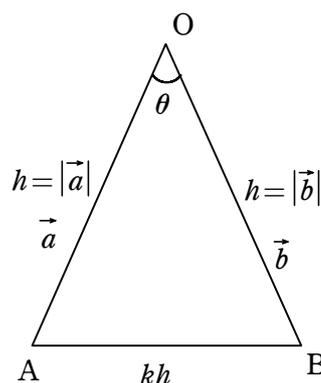


図2

(2)

G はベクトル \vec{DE} , \vec{DF} がつくる平面上の点だから、 $\vec{DG} = u\vec{DE} + v\vec{DF}$ と表現できる。同一平面上にはない3つの空間ベクトル(どのベクトルも他の2つのベクトルの和によって表されないということ)の和が0のときは、各ベクトルの係数は0であることを利用する。

(3)

\overrightarrow{EG} をできるだけ簡単なベクトルによって表現する。四辺形EDOGに着目することが(2)で求めた結果を活用することができて、良いであろう。

図2に三角形OAB \equiv 三角形OBC \equiv 三角形OAC である三角形を示す。ベクトル $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ 間の内積と h, kh との関係がわかる。

2 m を正の整数とする。次の問いに答えよ。

(1) 方程式 $70x + 130y = m$ が整数解をもつときの m の最小値を m_0 とする。 m_0 の値を求めよ。

(2) (1)で求めた m_0 に対して、方程式 $70x + 130y = m_0$ の整数解を求めよ。

(3) 次の条件を満たす m の最小値を求めよ。

方程式 $70x + 130y = m$ は、 x, y がともに正の整数である解を 3 組もつ。

< 解答 >

(1)

$$70x + 130y = m \text{ から } , 7x + 13y = \frac{m}{10}$$

x, y は整数だから、 $\frac{m}{10}$ は正の整数、最小の正の整数は 1 だから、 $\frac{m_0}{10} = 1$ 、 $\therefore m_0 = 10$

$7x + 13y = \frac{m}{10} = 1$ となって、7と13は互いに素だから、これを満たす整数解 x, y が存在する。

したがって、 $m_0 = 10$ (答)

(2)

$$70x + 130y = m_0 = 10, 7x + 13y = 1$$

$$x = \frac{1 - 13y}{7} = -2y + \frac{1 + y}{7}, \therefore 1 + y = 0, y = -1, x = 2 \text{ は解の一つ}$$

に $x = 2, y = -1$ を代入して、 $7 \times 2 + 13 \times (-1) = 1$

- から、 $7(x - 2) + 13(y + 1) = 0, \therefore 7(x - 2) = -13(y + 1), 7$ と -13 は互いに素だから、 $x - 2 = -13n, y + 1 = 7n$ とおける。ただし n は整数

したがって、 $x = -13n + 2, y = 7n - 1$ (n は整数) (答)

(3)

$$7x + 13y = \frac{m}{10} = k \quad (k \text{ は正の整数}) \text{ とおく。すると、} x = 2k, y = -k \text{ は解の一つ}$$

$$7 \times (2k) + 13 \times (-k) = k$$

- から、 $7(x - 2k) + 13(y + k) = 0, \therefore x - 2k = -13j, y + k = 7j$ (j は整数)

$$x = -13j + 2k \geq 1, \therefore j \leq \frac{2k - 1}{13}$$

$$y = 7j - k \geq 1, \therefore j \geq \frac{1 + k}{7}$$

すなわち, $\frac{1+k}{7} \leq j \leq \frac{2k-1}{13}$

3個の整数 j が決まるためには, $\frac{2k-1}{13} - \frac{1+k}{7} \geq 2, \therefore k \geq 202$

最小の $k=202$ のとき, $\frac{203}{7} \leq j \leq \frac{403}{13}, 29 \leq j \leq 31$

確かに, $j=29, 30, 31$ の3つに対して x, y がともに正の整数である解を3組もつ。

すなわち $x=404-13j, y=7j-202$

方程式 $70x + 130y = m$ において, x, y がともに正の整数である解を3組もつ m の最小値は

$\frac{m}{10} = 202, \therefore m = 2020$ (答)

< 解説 >

(1)

数学Aの教科書に記載の「 a と b が互いに素であるとき, 不定方程式 $ax+by=c$ は, 必ず整数解をもつ」との定理を覚えておこう。

(2)

与式の不定方程式を変形して, $x = \frac{1-13y}{7} = -2y + \frac{1+y}{7}$ から, 解の一つを見出す。

(3)

$ax+by=1$ の解の一つが x_1, y_1 であれば, $ax+by=k$ の解の一つは kx_1, ky_1 である。

3 n を正の整数とする。3種類の数字1, 2, 3を並べて, 各位の数が1, 2, 3のいずれかである n 桁の整数をすべて作る。数字は重複して使ってもよいし, 使わない数字があってもよい。

次の問いに答えよ。

(1) 各位の数の合計が奇数になる整数の総数を x_n , 各位の数の合計が偶数になる整数の総数を y_n とする。 $y_n + x_n, y_n - x_n$ および y_n の値を n を用いてそれぞれ表せ。

(2) 各位の数の合計が4の倍数になる整数の総数を z_n とするとき, z_n の値を n を用いて表せ。

(3) y_n, z_n は(1), (2)で求めたものとする。初項 c_1 は0でないとして, 次の条件を満たす等比級数列

$\{c_n\}$ の公比を求めよ。数列 $\left\{c_n \left(\frac{z_n}{y_n} - \frac{1}{2} \right)\right\}$ が0でない値に収束する。

< 解答 >

(1)

$y_n + x_n$ は3種類の数字1, 2, 3を並べてできる整数の総数だから, $y_n + x_n = 3^n$ (答)

y_n になるのは各位の数の合計が偶数になる整数の総計 y_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が2, 奇数になる整数の総計 x_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が1または3の2つの場合だから,

$y_n = y_{n-1} + 2x_{n-1}$

x_n になるのは x_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が2, y_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が1または3の2つ

の場合だから,

$$x_n = x_{n-1} + 2y_{n-1}$$

— から

$$y_n - x_n = -(y_{n-1} - x_{n-1}) = (-1)^2(y_{n-2} - x_{n-2}) = \dots = (-1)^{n-1}(y_1 - x_1) \\ = (-1)^{n-1}(-1) = (-1)^n \quad (\text{答})$$

+ から

$$2y_n = 3^n + (-1)^n, \therefore y_n = \frac{3^n + (-1)^n}{2} \quad (\text{答})$$

(2)

$(n-1)$ 桁までの各位の整数の和が偶数で4の倍数ではない整数の個数を y'_{n-1} とすれば

$$y_{n-1} = z_{n-1} + y'_{n-1}$$

y'_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が2であれば4の倍数, x_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が1または3であれば, それぞれ 0.5 の確率で4の倍数, したがって

$$z_n = y'_{n-1} + 0.5 \times 2x_{n-1} = y'_{n-1} + x_{n-1}$$

— から

$$z_n - y_{n-1} = x_{n-1} - z_{n-1}, \therefore z_n + z_{n-1} = x_{n-1} + y_{n-1} = 3^{n-1} = \frac{3^n}{4} + \frac{3^{n-1}}{4}$$

$$\text{したがって, } z_n - \frac{3^n}{4} = -\left(z_{n-1} - \frac{3^{n-1}}{4}\right) = (-1)^2\left(z_{n-2} - \frac{3^{n-2}}{4}\right) \\ = \dots = (-1)^{n-2}\left(z_2 - \frac{3^2}{4}\right) = (-1)^{n-2}\left(3 - \frac{3^2}{4}\right) = \frac{(-1)^{n-2} \cdot 3}{4} = \frac{(-1)^n \cdot 3}{4}$$

$$z_n = \frac{3^n}{4} + \frac{(-1)^n \cdot 3}{4}, n=1 \text{ のとき } z_1 = 0, n=2 \text{ のとき } z_2 = 3 \text{ となり, 正しい.}$$

$$\text{したがって, } z_n = \frac{3^n}{4} + \frac{(-1)^n \cdot 3}{4} \quad (\text{答})$$

(3)

$$\frac{z_n}{y_n} = \frac{1}{2} \frac{3^n + (-1)^n \cdot 3}{3^n + (-1)^n}, \frac{z_n}{y_n} - \frac{1}{2} = \frac{1}{2} \left\{ \frac{(-1)^n \cdot 3 - (-1)^n}{3^n + (-1)^n} \right\} = \frac{(-1)^n}{3^n + (-1)^n}$$

$$\text{したがって, } \left\{ c_n \left(\frac{z_n}{y_n} - \frac{1}{2} \right) \right\} = \frac{c_n (-1)^n}{3^n + (-1)^n} = \frac{c_n (-1)^n / 3^n}{1 + (-1)^n / 3^n}$$

$$\text{したがって, } \lim_{n \rightarrow \infty} \left\{ c_n \left(\frac{z_n}{y_n} - \frac{1}{2} \right) \right\} = \lim_{n \rightarrow \infty} \{ c_n (-1)^n / 3^n \}$$

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \{ c_n (-1)^n / 3^n \} \text{ が } 0 \text{ でない実数 } t \text{ となるためには, } c_n (-1)^n = 3^n t, \therefore c_n = (-3)^n t$$

したがって, 等比級数列 $\{c_n\}$ の公比は -3 (答)

< 解説 >

(1)

$y_n + x_n$ については, 容易に考えることができる。 x_n, y_n について表式を思い浮かべることは, なかなか難しい。ここで漸化式の考え方を思い出したい。 n 桁目までの整数の総数と $n-1$ 桁目までの整数の総数との関係 (漸化式) が求まれば, 一般的な表式を求めることは容易になる。

(2)

(1)と同様に, z_n を $(n-1)$ 桁目までの整数の個数によって表現する。 n 桁目の数字と各位の整数の和が4の倍数になる場合との関係を考える。

ここで, $z_n + z_{n-1} = x_{n-1} + y_{n-1} = 3^{n-1}$ の漸化式で表される数列の一般項を求めることがポイントである。 $3^{n-1} = \frac{3^n}{4} + \frac{3^{n-1}}{4}$ であることに気づくと計算は容易だ。

4 n を0以上の整数とし, 次の式で I_n を定める。

$$I_0 = \int_{-2}^2 \sqrt{4-x^2} dx, I_n = \int_{-2}^2 x^n \sqrt{4-x^2} dx \quad (n=1, 2, 3, \dots)$$

次の問いに答えよ。

(1) I_0, I_1 および I_2 の値を求めよ。

(2) $\frac{I_{2n+2}}{I_{2n}}$ の値を n を用いて表せ。

(3) $\lim_{n \rightarrow +\infty} \frac{I_{2n}}{2^n} = \infty$ および $\lim_{n \rightarrow +\infty} \frac{I_{2n}}{2^{2n}} = 0$ が成り立つことを証明せよ。

< 解答 >

(1)

$$I_0 = \int_{-2}^2 \sqrt{4-x^2} dx = 2 \int_0^2 \sqrt{4-x^2} dx$$

$x=2\sin\theta$ とおく。 $\theta=0 \rightarrow x=0, \theta=\frac{\pi}{2} \rightarrow x=2, \sqrt{4-x^2}=2\sqrt{1-\sin^2\theta}=2\cos\theta, \frac{dx}{d\theta}=2\cos\theta,$

$$\text{したがって} \int_0^2 \sqrt{4-x^2} dx = \int_0^{\frac{\pi}{2}} 4\cos^2\theta d\theta = 2 \int_0^{\frac{\pi}{2}} (\cos 2\theta + 1) d\theta = 2 \left[\frac{1}{2} \sin 2\theta + \theta \right]_0^{\frac{\pi}{2}} = \pi$$

したがって $I_0 = 2\pi$ (答)

$f_n(x) = x^n \sqrt{4-x^2}$ は n が奇数のとき奇関数,

なぜなら $f_n(-x) = (-x)^n \sqrt{4-(-x)^2} = (-1)^n x^n \sqrt{4-x^2} = -f_n(x)$

したがって $I_n = \int_{-2}^2 x^n \sqrt{4-x^2} dx$ は, n が奇数のとき $I_n = 0, \therefore I_1 = 0$ (答)

$$\int x^n \sqrt{4-x^2} dx = 4 \int (2\sin\theta)^n \cos^2\theta d\theta = 2^{n+2} \int \sin^n\theta \cos^2\theta d\theta$$

$$\begin{aligned} n=2 \text{のとき, } \int x^2 \sqrt{4-x^2} dx &= 2^4 \int \sin^2\theta \cos^2\theta d\theta = 2^2 \int (2\sin\theta \cos\theta)^2 d\theta = 2^2 \int \sin^2 2\theta d\theta \\ &= 2 \int (1 - \cos 4\theta) d\theta = 2 \left(\theta - \frac{1}{4} \sin 4\theta \right) \end{aligned}$$

$$I_2 = \int_{-2}^2 x^2 \sqrt{4-x^2} dx = 2 \int_0^2 x^2 \sqrt{4-x^2} dx = 4 \left[\theta - \frac{1}{4} \sin 4\theta \right]_0^{\frac{\pi}{2}} = 2\pi \quad (\text{答})$$

(2)

$$I_{2n} = \int_{-2}^2 x^{2n} \sqrt{4-x^2} dx = 2 \int_0^2 x^{2n} \sqrt{4-x^2} dx = 2^{2n+3} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos^2 \theta d\theta$$

$$I_{2n+2} = \int_{-2}^2 x^{2n+2} \sqrt{4-x^2} dx = 2 \int_0^2 x^{2n+2} \sqrt{4-x^2} dx = 2^{2n+5} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n+2} \theta \cos^2 \theta d\theta$$

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n+2} \theta \cos^2 \theta d\theta = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \sin^2 \theta \cos^2 \theta d\theta = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta (1 - \cos^2 \theta) \cos^2 \theta d\theta$$

$$= \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta (1 - \cos^2 \theta) \cos^2 \theta d\theta = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos^2 \theta d\theta - \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos^4 \theta d\theta$$

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos^2 \theta d\theta = A_{2n}, \quad \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n+2} \theta \cos^2 \theta d\theta = A_{2n+2} \text{ とおく。}$$

$$\text{から, } A_{2n+2} = A_{2n} - \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos^4 \theta d\theta$$

$$\cos^4 \theta = \cos^2 \theta \cos^2 \theta = \frac{1}{2} \cos^2 \theta (1 + \cos 2\theta) \text{ を用いて,}$$

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos^4 \theta d\theta = \frac{1}{2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos^2 \theta (1 + \cos 2\theta) d\theta$$

$$= \frac{1}{2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos^2 \theta d\theta + \frac{1}{2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos^2 \theta \cos 2\theta d\theta$$

$$= \frac{1}{2} A_{2n} + \frac{1}{2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta (1 - \sin^2 \theta) \cos 2\theta d\theta$$

$$= \frac{1}{2} A_{2n} + \frac{1}{2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos 2\theta d\theta - \frac{1}{2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n+2} \theta \cos 2\theta d\theta$$

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos 2\theta d\theta = \left[\frac{1}{2} \sin^{2n} \theta \sin 2\theta - 2n \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n-2} \theta \cos^2 \theta d\theta \right]_0^{\frac{\pi}{2}}$$

$$= -2n \left[\int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n-2} \theta \cos^2 \theta d\theta \right]_0^{\frac{\pi}{2}} = -2n \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n-2} \theta \cos^2 \theta d\theta = -2n A_{2n-2}$$

$$\text{同様に, } \frac{1}{2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n+2} \theta \cos 2\theta d\theta = -(2n+2) A_{2n+2}$$

$$\text{に, } \text{を代入して, } \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos^4 \theta d\theta = \frac{1}{2} A_{2n} - n A_{2n} + (n+1) A_{2n+2}$$

を に代入して,

$$A_{2n+2} = A_{2n} - \frac{1}{2} A_{2n} + n A_{2n} - (n+1) A_{2n+2} = \left(n + \frac{1}{2} \right) A_{2n} - (n+1) A_{2n+2}$$

$$\therefore A_{2n+2} = \frac{2n+1}{2(n+2)} A_{2n}$$

$$\text{から } I_{2n} = 2^{2n+3} A_{2n}, \quad \text{から } I_{2n+2} = 2^{2n+5} A_{2n+2}$$

したがって, $\frac{I_{2n+2}}{I_{2n}} = \frac{2^2 A_{2n+2}}{A_{2n}} = \frac{2(2n+1)}{n+2}$ (答)

(3)

$$\frac{I_{2n}}{I_{2n-2}} = \frac{2(2n-1)}{n+1} \text{ から, } I_{2n} = \frac{2(2n-1)}{n+1} I_{2n-2} = \frac{4-2/n}{1+1/n} I_{2n-2} = r_n I_{2n-2}, \text{ (ただし } n \geq 1)$$

$$r_1=1, r_2=2, r_{n+1} > r_n, 1 \leq r_n = \frac{4-2/n}{1+1/n} < 4, \lim_{n \rightarrow +\infty} r_n = 4$$

$$I_{2n} = r_n I_{2n-2} = r_n r_{n-1} I_{2n-4} = \dots = r_n r_{n-1} \dots r_1 I_0 = 2 r_n r_{n-1} \dots r_1 \pi$$

$$\frac{I_{2n}}{2^n} = \left(\frac{r_n}{2}\right) \left(\frac{r_{n-1}}{2}\right) \dots \left(\frac{r_1}{2}\right) I_0, \text{ 任意の整数 } k \geq 3 \text{ に対して } 1 < \frac{r_k}{2} < 2$$

$$\text{したがって, } \lim_{n \rightarrow +\infty} \left(\frac{r_n}{2}\right) \left(\frac{r_{n-1}}{2}\right) \dots \left(\frac{r_1}{2}\right) = \infty, \therefore \lim_{n \rightarrow +\infty} \frac{I_{2n}}{2^n} = \infty$$

$$\begin{aligned} \frac{I_{2n}}{2^{2n}} &= \frac{r_n I_{2n-2}}{2^{2n}} = \left(\frac{r_n}{2^2}\right) \frac{I_{2n-2}}{2^{2n-2}} = \left(\frac{r_n}{2^2}\right) \left(\frac{r_{n-1}}{2^2}\right) \frac{I_{2n-4}}{2^{2n-4}} = \dots = \left(\frac{r_n}{2^2}\right) \left(\frac{r_{n-1}}{2^2}\right) \dots \left(\frac{r_1}{2^2}\right) I_0 \\ &= 2 \left(\frac{r_n}{2^2}\right) \left(\frac{r_{n-1}}{2^2}\right) \dots \left(\frac{r_1}{2^2}\right) \pi \end{aligned}$$

$$\text{任意の正の整数 } k \text{ に対して } 0 < \frac{r_k}{2^2} < 1$$

$$\text{したがって, } \lim_{n \rightarrow +\infty} \left(\frac{r_n}{2^2}\right) \left(\frac{r_{n-1}}{2^2}\right) \dots \left(\frac{r_1}{2^2}\right) = 0, \therefore \lim_{n \rightarrow +\infty} \frac{I_{2n}}{2^{2n}} = 0$$

< 解説 >

(1)

$I_0 = \int_{-2}^2 \sqrt{4-x^2} dx, I_n = \int_{-2}^2 x^n \sqrt{4-x^2} dx$ のような積分では, $x=2\sin\theta$ という変数変換によって, を外した計算が可能になることは, 読者の皆さんはよく承知のことと思う。

(2)

I_{2n}, I_{2n+2} が, のように簡潔に表現されるのだが, 両者の関係を示す表式を求めることは容易ではない。原始関数を単純に求められないので, 定積分を実行できない。部分積分法の活用が閃くだろうが, 式の変形の方法性が明瞭に定まらない。

とを凝視し, まず を を露わに含む形で表現してみる。残る項を, さらに の表式に近い表式で表現することを考える。すると, のような簡潔な関係式が得られる。この過程は思考を導く指導原理があるわけではなく, 試行錯誤的な計算になるので, 計算の方向を誤ると大きな時間ロスを引きかねない。

の導出において, 部分積分法を用いて, 表式を整理することがポイントとである。

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^{2n} \theta \cos 2\theta d\theta = \left[\frac{1}{2} \sin^{2n} \theta \sin 2\theta - 2n \int \sin^{2n} \theta \cos^2 \theta d\theta \right]_0^{\frac{\pi}{2}}$$

$$\int f(\theta) \cdot g'(\theta) d\theta = f(\theta)g(\theta) - \int f'(\theta)g(\theta) d\theta \text{ において,}$$

$$f(\theta) = \sin^{2n} \theta, g(\theta) = \frac{1}{2} \sin 2\theta \text{ としている。}$$

(3)

(2)の結果である $\frac{I_{2n+2}}{I_{2n}} = \frac{2^2 A_{2n+2}}{A_{2n}} = \frac{2(2n+1)}{n+2}$, $\frac{I_{2n}}{I_{2n-2}} = \frac{2(2n-1)}{n+1}$ の表式が明らかになれば容易であろう。

5 複素数を極形式で表したときの偏角 θ は $0 \leq \theta < 2\pi$ の範囲にとる。3以上の整数 n に対して、方程式 $z^n = i$ の解を極形式で表したとき、偏角の小さい順に $\alpha_0, \alpha_1, \dots, \alpha_{n-1}$ とする。

ただし、 i は虚数単位である。次の問いに答よ。

- (1) $k=0, 1, 2, \dots, n-1$ に対して、 α_k を極形式で表せ。
- (2) $k=0, 1, 2, \dots, n-1$ に対して、 $\alpha_k = \alpha_0 \beta_k$ と $(\beta_k)^n = 1$ を同時に満たす複素数 β_k が存在することを証明せよ。
- (3) $k=0, 1, 2, \dots, n-1$ に対して、 $\gamma_k = \alpha_0 + \alpha_1 + \dots + \alpha_k$ とする。また、 γ_k を表す複素数平面上の点を P_k とする。このとき、 $P_0, P_1, P_2, \dots, P_{n-1}$ を頂点とする多角形は正 n 角形であることを証明せよ。
- (4) $n=6$ とし、(3)で求めた正六角形の頂点 $P_0, P_1, P_2, \dots, P_5$ を通る円の中心が表す複素数を求めよ。ただし、求めた答えの複素数には極形式を使わないこと。

< 解答 >

(1)

$z = \cos \theta + i \sin \theta$ として、ド・モアブルの定理から $z^n = (\cos \theta + i \sin \theta)^n = \cos n\theta + i \sin n\theta = i$ したがって、 $\cos n\theta = 0, \sin n\theta = 1, \therefore n\theta = \frac{\pi}{2} + 2k\pi = \frac{\pi}{2}(1+4k), k=0, 1, 2, \dots, n-1$

したがって、 $\theta_k = \frac{\pi}{2n}(1+4k), k=0, 1, 2, \dots, n-1$

$0 < \theta_k \leq \frac{\pi}{2n}(1+4n-4) = \frac{\pi}{2n}(4n-3) = 2\pi \left(1 - \frac{3}{4n}\right) < 2\pi$ だから、偏角の条件 $0 \leq \theta < 2\pi$ を満たす。

したがって、 $\alpha_k = \cos \frac{\pi}{2n}(1+4k) + i \sin \frac{\pi}{2n}(1+4k), k=0, 1, 2, \dots, n-1$ (答)

(2)

ド・モアブルの定理を活用して、

$$\beta_k = \frac{\alpha_k}{\alpha_0} = \frac{\cos \frac{\pi}{2n}(1+4k) + i \sin \frac{\pi}{2n}(1+4k)}{\cos \frac{\pi}{2n} + i \sin \frac{\pi}{2n}} = \frac{\left(\cos \frac{\pi}{2n} + i \sin \frac{\pi}{2n}\right)^{1+4k}}{\cos \frac{\pi}{2n} + i \sin \frac{\pi}{2n}}$$

$$= \left(\cos \frac{\pi}{2n} + i \sin \frac{\pi}{2n}\right)^{4k}$$

この β_k について、 $(\beta_k)^n = \left(\cos \frac{\pi}{2n} + i \sin \frac{\pi}{2n}\right)^{4kn} = \cos 2k\pi + i \sin 2k\pi = 1$

したがって、 $\alpha_k = \alpha_0 \beta_k$ と $(\beta_k)^n = 1$ を同時に満たす複素数 β_k が存在する。

(3)

$$\gamma'_k = \frac{\gamma_k}{\alpha_0} \text{ とすれば,}$$

$$\gamma'_k = \frac{\gamma_k}{\alpha_0} = \frac{\alpha_0}{\alpha_0} + \frac{\alpha_1}{\alpha_0} + \dots + \frac{\alpha_k}{\alpha_0} = \beta_0 + \beta_1 + \dots + \beta_k, \quad k=0, 1, 2, \dots, n-1$$

$(\beta_k)^n = 1$ だから, β_k は1の n 乗根で, 複素数平面上の原点を中心とする単位円の円周を n 等分する点

$$\text{を示す複素数で, } \beta_0 + \beta_1 + \dots + \beta_{n-1} = 0, \quad \beta_k = \cos \frac{2\pi k}{n} + i \sin \frac{2\pi k}{n}$$

$$\gamma'_k \text{ を表す複素数平面上的点を } P'_k \text{ とすれば, } \overrightarrow{P'_{k-1}P'_k} = \beta_k, \quad |\beta_k| = 1$$

$$\beta_0 = 1, \quad \overrightarrow{P'_{n-1}P'_0} = \beta_0 - (\beta_0 + \beta_1 + \dots + \beta_{n-1}) = \beta_0 = 1$$

したがって, $P'_0, P'_1, P'_2, \dots, P'_{n-1}$ を頂点とする多角形は, P'_{n-1} を原点とし, 辺 $P'_{n-1}P'_0$ が実軸上にある, 辺長1の正 n 角形である。

$$\gamma_k = \alpha_0 \gamma'_k, \quad |\alpha_0| = 1, \quad \arg \alpha_0 = \frac{\pi}{2n} \text{ だから,}$$

$P_0, P_1, P_2, \dots, P_{n-1}$ を頂点とする多角形は $P'_0, P'_1, P'_2, \dots, P'_{n-1}$ を頂点とする正多角形を原点の回りに $\frac{\pi}{2n}$ 回転した正多角形である。

(4)

$$P'_0, P'_1, P'_2, \dots, P'_5 \text{ を頂点とする正6角形の中心 } C' \text{ は } \frac{1 + \sqrt{3}i}{2} = \cos \frac{\pi}{3} + i \sin \frac{\pi}{3}$$

正6角形 $P_0, P_1, P_2, \dots, P_5$ は, 正6角形 $P'_0, P'_1, P'_2, \dots, P'_5$ を原点の回りに

$\frac{\pi}{2 \times 6} = \frac{\pi}{12}$ 回転したものであるから, 中心 $C(X, Y)$ を表す複素数は

$$X + Yi = \left(\cos \frac{\pi}{12} + i \sin \frac{\pi}{12} \right) \left(\cos \frac{\pi}{3} + i \sin \frac{\pi}{3} \right) = \left(\cos \frac{5\pi}{12} + i \sin \frac{5\pi}{12} \right)$$

$$\cos \frac{5\pi}{12} = \cos \left(\frac{\pi}{6} + \frac{\pi}{4} \right) = \cos \frac{\pi}{6} \cos \frac{\pi}{4} - \sin \frac{\pi}{6} \sin \frac{\pi}{4} = \frac{\sqrt{3}}{2} \frac{\sqrt{2}}{2} - \frac{1}{2} \frac{\sqrt{2}}{2} = \frac{\sqrt{2}}{4} (\sqrt{3} - 1)$$

$$\sin \frac{5\pi}{12} = \sin \left(\frac{\pi}{6} + \frac{\pi}{4} \right) = \sin \frac{\pi}{6} \cos \frac{\pi}{4} + \cos \frac{\pi}{6} \sin \frac{\pi}{4} = \frac{1}{2} \frac{\sqrt{2}}{2} + \frac{\sqrt{3}}{2} \frac{\sqrt{2}}{2} = \frac{\sqrt{2}}{4} (\sqrt{3} + 1)$$

$$\text{中心が表す複素数は } \frac{\sqrt{2}}{4} (\sqrt{3} - 1) + \frac{\sqrt{2}}{4} (\sqrt{3} + 1)i \quad (\text{答})$$

< 解説 >

(1)

ここは, ド・モアブルの定理を使うと直ちに考えたい。

(2)

ここも(1)と同様である。

(3)

(2)において, 複素数 β_k が1の n 乗根であることから正 n 角形を構成する点であることに気づく。

れば，視察により簡単に一つの解が見つかる。難易度 B。

3

整数の問題。一読したとき，やや難しい問題のように感じる。しかし確率漸化式のような問題と捉えることができれば，大きな困難なく解答にいたる。難易度 B +。

4

積分の問題。(2)では計算の方針の見通しが困難で，方向を誤ると迷路にはまって，思わぬ時間ロス強いられそう。難易度 A。

5

複素数平面の問題として，その基本的な理解を問う適切な問題である。(3)，(4)の解答方針には少々着想が必要であり，これも複素数平面に関する基本的な理解に関係する。難易度は B。

< 人文，教育，経済社会，農，創生学部 >

(90分)

1 n を正の整数とする。3 種類の数字 1, 2, 3 を並べて，各位の数が 1, 2, 3 のいずれかである n 桁の整数をすべて作る。数字は重複して使ってもよいし，使わない数字があってもよい。各位の数の合計が奇数になる整数の総数を x_n ，各位の数の合計が偶数になる整数の総数を y_n とする。

また，各位の数の合計が 4 の倍数になる整数の総数を z_n とする。次の問いに答えよ。

(1) n を 2 以上の整数とするとき，

$$x_n = ax_{n-1} + by_{n-1}$$

$$y_n = cx_{n-1} + dy_{n-1}$$

を満たす定数 a, b, c, d の値をそれぞれ求めよ。

(2) $y_n + x_n, y_n - x_n$ および y_n の値を n を用いてそれぞれ表せ。

(3) z_n の値を n を用いて表せ。

< 解答 >

理系の 3 から (3) を除いたものとはほぼ同じ。解答もほぼ同じになるが，記載する。

(1)

x_n になるのは各位の数の合計が奇数になる整数の総計 x_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が 2，偶数になる整数の総計 y_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が 1 または 3 の 2 つの場合だから，

$$x_n = x_{n-1} + 2y_{n-1} \quad , \text{したがって, } a=1, b=2 \quad (\text{答})$$

y_n になるのは各位の数の合計が偶数になる整数の総計 y_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が 2，奇数になる整数の総計 x_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が 1 または 3 の 2 つの場合だから，

$$y_n = y_{n-1} + 2x_{n-1} = 2x_{n-1} + y_{n-1} \quad , \text{したがって, } c=2, d=1 \quad (\text{答})$$

(2)

$y_n + x_n$ は 3 種類の数字 1, 2, 3 を並べてできる n 桁の整数の総数だから，

$$y_n + x_n = 3^n \quad (\text{答})$$

— から

$$y_n - x_n = -(y_{n-1} - x_{n-1}) = (-1)^2(y_{n-2} - x_{n-2}) = \dots = (-1)^{n-1}(y_1 - x_1)$$

$$= (-1)^{n-1}(-1) = (-1)^n \quad (\text{答})$$

+ から

$$2y_n = 3^n + (-1)^n, \therefore y_n = \frac{3^n + (-1)^n}{2} \quad (\text{答})$$

(3)

$(n-1)$ 桁までの各位の整数の和が偶数で4の倍数ではない整数の個数を y'_{n-1} とすれば

$$y_{n-1} = z_{n-1} + y'_{n-1}$$

y'_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が2であれば4の倍数, x_{n-1} に含まれる整数の n 桁目が1または3であれば, それぞれ0.5の確率で4の倍数, したがって

$$z_n = y'_{n-1} + 0.5 \times 2x_{n-1} = y'_{n-1} + x_{n-1}$$

- から

$$z_n - y_{n-1} = x_{n-1} - z_{n-1}, \therefore z_n + z_{n-1} = x_{n-1} + y_{n-1} = 3^{n-1} = \frac{3^n}{4} + \frac{3^{n-1}}{4}$$

$$\text{したがって, } z_n - \frac{3^n}{4} = -\left(z_{n-1} - \frac{3^{n-1}}{4}\right) = (-1)^2\left(z_{n-2} - \frac{3^{n-2}}{4}\right)$$

$$= \dots = (-1)^{n-2}\left(z_2 - \frac{3^2}{4}\right) = (-1)^{n-2}\left(3 - \frac{3^2}{4}\right) = \frac{(-1)^{n-2} \cdot 3}{4} = \frac{(-1)^n \cdot 3}{4}$$

$$z_n = \frac{3^n}{4} + \frac{(-1)^n \cdot 3}{4}, n=1 \text{ のとき } z_1=0, n=2 \text{ のとき } z_2=3 \text{ となり, 正しい。}$$

$$\text{したがって, } z_n = \frac{3^n}{4} + \frac{(-1)^n \cdot 3}{4} \quad (\text{答})$$

< 解説 >

解説は理系を参照する。

(1), (2)

理系 [3] の(1)にほぼ同じ。

(3)

理系 [3] の(2)に同じ。

[2] 正四面体 OABC の辺 OA を 2 : 1 に内分する点を D, 辺 AB を $(1-x) : x$ に内分する点を E, 辺 BC を 1 : 2 に内分する点を F とする。ただし, x は $0 < x < 1$ を満たす。3 点 D, E, F を通る平面と直線 OC の交点を G とする。 $\overrightarrow{OA} = \vec{a}, \overrightarrow{OB} = \vec{b}, \overrightarrow{OC} = \vec{c}$ として, 次の問いに答よ。

(1) ベクトル \overrightarrow{DE} および \overrightarrow{DF} を $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ および x を用いて表せ。

(2) $\overrightarrow{OG} = t\vec{c}$ を満たす t の値を x を用いて表せ。

(3) 線分 EG の長さを最小にする x の値を求めよ。

また, 線分 EG の長さの最小値は辺 OA の長さの何倍であるか求めよ。

< 解答 >

理系の問題 [1] を少々易化した問題。易化したところは，正四面体であること，変数 y を定数としたことである。

(1)

$$\overrightarrow{DE} = \overrightarrow{DA} + \overrightarrow{AE}$$

$$\overrightarrow{DA} = \frac{1}{3}\vec{a}, \overrightarrow{AE} = (1-x)\overrightarrow{AB} = (1-x)(\overrightarrow{AO} + \overrightarrow{OB}) = (1-x)(-\vec{a} + \vec{b})$$

$$\text{したがって, } \overrightarrow{DE} = \frac{1}{3}\vec{a} + (1-x)(-\vec{a} + \vec{b}) = \left(x - \frac{2}{3}\right)\vec{a} + (1-x)\vec{b} \quad (\text{答})$$

$$\overrightarrow{DF} = \overrightarrow{DO} + \overrightarrow{OC} + \overrightarrow{CF}$$

$$\overrightarrow{DO} = -\frac{2}{3}\vec{a}, \overrightarrow{CF} = \frac{2}{3}\overrightarrow{CB} = \frac{2}{3}(\overrightarrow{CO} + \overrightarrow{OB}) = \frac{2}{3}(-\vec{c} + \vec{b})$$

$$\text{したがって, } \overrightarrow{DF} = -\frac{2}{3}\vec{a} + \vec{c} + \frac{2}{3}(-\vec{c} + \vec{b}) = -\frac{2}{3}\vec{a} + \frac{2}{3}\vec{b} + \frac{1}{3}\vec{c} \quad (\text{答})$$

(2)

$\overrightarrow{DG} = u\overrightarrow{DE} + v\overrightarrow{DF}$ とおく。ただし u, v は実数

$$\begin{aligned} \overrightarrow{OG} = t\vec{c} &= \overrightarrow{OD} + \overrightarrow{DG} = \frac{2}{3}\vec{a} + u\overrightarrow{DE} + v\overrightarrow{DF} \\ &= \frac{2}{3}\vec{a} + u\left(x - \frac{2}{3}\right)\vec{a} + u(1-x)\vec{b} - \frac{2}{3}v\vec{a} + \frac{2}{3}v\vec{b} + \frac{1}{3}v\vec{c} \\ &= \left\{\frac{2}{3} + \left(x - \frac{2}{3}\right)u - \frac{2}{3}v\right\}\vec{a} + \left\{(1-x)u + \frac{2}{3}v\right\}\vec{b} + \frac{1}{3}v\vec{c} \end{aligned}$$

ベクトル $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ は同一平面にないから，各ベクトルの係数について，以下が成立する。

$$\frac{2}{3} + \left(x - \frac{2}{3}\right)u - \frac{2}{3}v = 0$$

$$(1-x)u + \frac{2}{3}v = 0$$

$$t = \frac{1}{3}v$$

， ， から $t = 1 - x$ (答)

(3)

$$\begin{aligned} \overrightarrow{EG} &= \overrightarrow{ED} + \overrightarrow{DG} = -\overrightarrow{DE} + \overrightarrow{DO} + \overrightarrow{OG} = -\overrightarrow{DE} - \overrightarrow{OD} + \overrightarrow{OG} \\ &= -\left\{\left(x - \frac{2}{3}\right)\vec{a} + (1-x)\vec{b}\right\} - \frac{2}{3}\vec{a} + (1-x)\vec{c} = -x\vec{a} - (1-x)\vec{b} + (1-x)\vec{c} \end{aligned}$$

$$EG = |\overrightarrow{EG}| = \sqrt{|\overrightarrow{EG}|^2}$$

$$|\overrightarrow{EG}|^2 = \overrightarrow{EG} \cdot \overrightarrow{EG} = \{-x\vec{a} - (1-x)\vec{b} + (1-x)\vec{c}\} \cdot \{-x\vec{a} - (1-x)\vec{b} + (1-x)\vec{c}\}$$

ここで， $|\vec{a}| = |\vec{b}| = |\vec{c}| = h$ ， $\vec{a} \cdot \vec{b} = \vec{b} \cdot \vec{c} = \vec{c} \cdot \vec{a} = h^2 \cos 60^\circ = \frac{h^2}{2}$ ，とにおいて整理すると

$$|\overrightarrow{EG}|^2 = \{x^2 + (1-x)^2 + (1-x)^2\}h^2 + 2\{x(1-x) - x(1-x) - (1-x)^2\}\frac{h^2}{2}$$

$$= \{x^2 + (1-x)^2\} h^2 = (2x^2 - 2x + 1) h^2 = \left\{2\left(x - \frac{1}{2}\right)^2 + \frac{1}{2}\right\} h^2$$

したがって、 $x = \frac{1}{2}$ (答) のとき、 $|\vec{EG}|^2$ のは最小値 $\frac{h^2}{2}$ をとるから、

線分 EG の長さの最小値は $\frac{h}{\sqrt{2}}$ 、したがって辺 OA の長さの $\frac{1}{\sqrt{2}}$ 倍 (答)

< 解説 >

図 1、図 2 のような図を描いて考察する。各ベクトルをベクトル \vec{a} 、 \vec{b} 、 \vec{c} によって表現する。

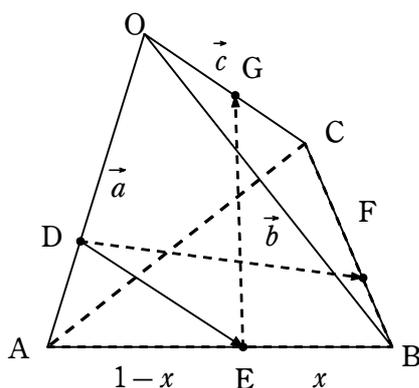


図 1

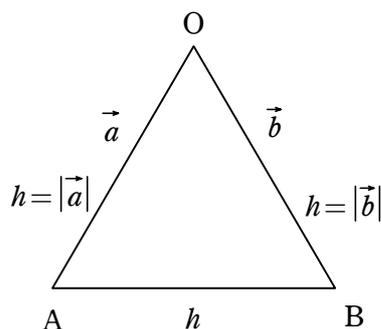


図 2

3 放物線に関する次の問いに答よ。

(1) 正の整数の組 (m, n) に対して、次の条件を考える。

放物線 $y = mx^2 - 6x + n$ は、 x 軸と $0 < x < \frac{3}{2}$ の範囲で相異なる 2 点で交わる。

この条件を満たす正の整数の組 (m, n) のうちで、 $m+n$ の値が最小になるのは、 $(4, 1)$ のときであることを証明せよ。

(2) 2 つの放物線 $y = 4x^2 - 6x + 1$ と $y = x^2 - 6x + 4$ の両方に接する直線は 2 本ある。

それらの直線の方程式を求めよ。

(3) 不等式 $x > 0$ で表される領域において、(2) の 2 つの放物線と (2) で求めた直線のうち 1 本で囲まれた部分の面積を求めよ。

< 解答 >

(1)

$$y = f(x) = mx^2 - 6x + n = m\left(x - \frac{3}{m}\right)^2 - \frac{9}{m} + n$$

条件を満たすためには、

$$0 < \frac{3}{m} < \frac{3}{2}, \text{ したがって } 2 < m$$

$$-\frac{9}{m} + n < 0, \text{ したがって } n < \frac{9}{m}$$

$$f(0)=n>0, f\left(\frac{3}{2}\right)=\frac{9}{4}m-9+n>0, \text{したがって } n>9-\frac{9}{4}m$$

から m は $m \geq 3$ の整数, から $m \leq \frac{8}{n}, n \geq 1$ だから, $m \leq 8$

$m=3$ のとき, から $\frac{9}{4} < n < 3, \therefore$ 整数 n は存在しない。

$m=4$ のとき, から $0 < n < \frac{9}{4}, \therefore n=1$, または 2

$5 \leq m \leq 8$ のとき, から $n < \frac{9}{m}, \therefore n=1$

以上によって, $m+n$ が最小になるのは, $(m, n) = (4, 1)$ のとき。

(2)

$$y=f_1(x)=4x^2-6x+1, \quad ,$$

と接する直線の方程式を $y=ax+b$

$$, \quad \text{を連立させた方程式 } 4x^2-6x+1=ax+b, \text{ すなわち } 4x^2-(6+a)x+1-b=0$$

は重解をもつので, 解の判別式 $D_1=(6+a)^2-16(1-b)=0$

$$y=f_2(x)=x^2-6x+4, \quad ,$$

とを連立させると, $x^2-6x+4=ax+b$, すなわち $x^2-(6+a)x+4-b=0$

が重解をもつとすれば, はに接する。の解の判別式は $D_2=(6+a)^2-4(4-b)=0$

, が共通の a, b をもてば, $y=ax+b$ は 2 つの放物線の接線である。

, を連立させると, $b=0, a=-6 \pm 4 = -2$ または -10

したがって, 2 つの放物線と接する直線は $y=-2x, y=-10x$ (答)

(3)

題意を満たす接線は $y=-2x$

$x > 0$ において, との接点は $\left(\frac{1}{2}, -1\right)$, との接点は $(2, -4)$, との交点は $(1, -1)$

したがって, 求める面積は $\int_{\frac{1}{2}}^1 \{(4x^2-6x+1)-(-2x)\}dx + \int_1^2 \{(x^2-6x+4)-(-2x)\}dx$

$$= \left[\frac{4}{3}x^3 - 2x^2 + x \right]_{\frac{1}{2}}^1 + \left[\frac{1}{3}x^3 - 2x^2 + 4x \right]_1^2 = \frac{1}{2} \quad (\text{答})$$

< 解説 >

放物線と2次方程式に関する問題。

(1)

放物線の頂点の位置, x の範囲の両端の値を, 条件を満たすようにする必要がある。この際, 図 1 のような図を描いて考察することが良い。条件を満たす (m, n) から $m+n$ が最小になるものを探す。

(2)

放物線と直線が接するとは, 両者の方程式を連立させた2次方程式が重解をもつということである。

(3)

図 2 のような図を大雑把に描いて, 題意を把握する。

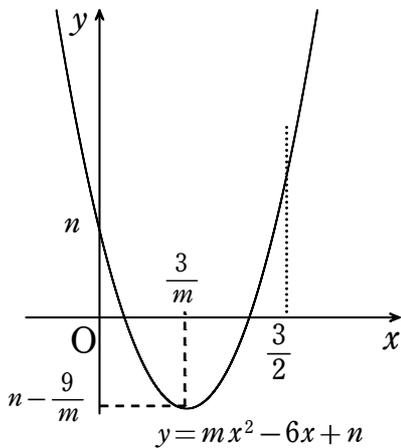


図 1

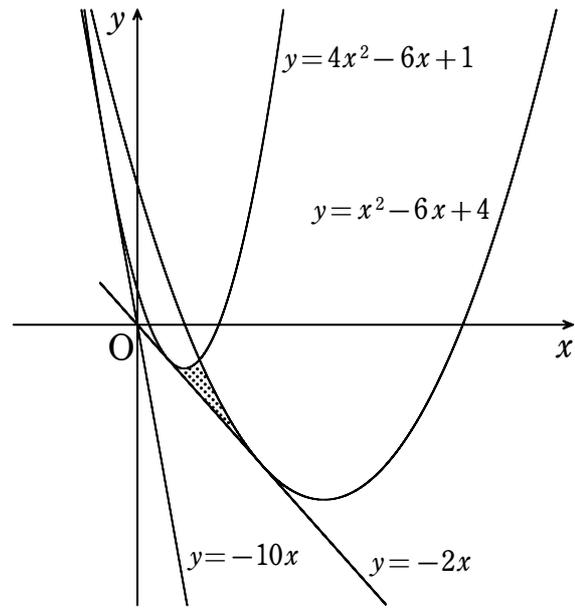


図 2

4 単位円 $x^2 + y^2 = 1$ 上を動く点 Q の座標を (X, Y) とする。次の問いに答えよ。

- (1) x 軸の正の部分に始線をとって、点 Q が一般角 θ の動径上にあるとき、 X, Y の値を θ を用いてそれぞれ表せ。
- (2) $2X + 3Y$ の取り得る値の範囲を求めよ。
- (3) $XY - Y^2 + \frac{1}{2}$ の最大値、最小値を求めよ。また、そのときの点 Q の座標をすべて求めよ。
- (4) $6X^2 - 3X + 4Y^2$ の最大値、最小値を求めよ。また、そのときの点 Q の座標をすべて求めよ。

< 解答 >

(1)

$$X = \cos \theta, Y = \sin \theta \quad (\text{答})$$

(2)

$$2X + 3Y = 2\cos \theta + 3\sin \theta = \sqrt{2^2 + 3^2} \left(\frac{2}{\sqrt{2^2 + 3^2}} \cos \theta + \frac{3}{\sqrt{2^2 + 3^2}} \sin \theta \right)$$

$$\frac{2}{\sqrt{2^2 + 3^2}} = \frac{2}{\sqrt{13}} = \sin \alpha, \quad \frac{3}{\sqrt{13}} = \cos \alpha \text{ とおけば,}$$

$$2X + 3Y = \sqrt{13} (\sin \alpha \cos \theta + \sin \theta \cos \alpha) = \sqrt{13} \sin(\theta + \alpha)$$

$$0 \leq \theta < 2\pi \text{ だから, } \alpha \leq \theta + \alpha < 2\pi + \alpha, \quad -1 \leq \sin(\theta + \alpha) \leq 1 \text{ だから, } -\sqrt{13} \leq 2X + 3Y \leq \sqrt{13} \quad (\text{答})$$

(3)

$$XY - Y^2 + \frac{1}{2} = \sin \theta \cos \theta - \sin^2 \theta + \frac{1}{2} = \frac{1}{2} \sin 2\theta - \frac{1 - \cos 2\theta}{2} + \frac{1}{2}$$

$$= \frac{1}{2} (\sin 2\theta + \cos 2\theta) = \frac{1}{\sqrt{2}} \left(\frac{1}{\sqrt{2}} \sin 2\theta + \frac{1}{\sqrt{2}} \cos 2\theta \right)$$

$$= \frac{1}{\sqrt{2}} \left(\cos \frac{\pi}{4} \sin 2\theta + \sin \frac{\pi}{4} \cos 2\theta \right) = \frac{1}{\sqrt{2}} \sin \left(2\theta + \frac{\pi}{4} \right)$$

$$0 \leq \theta < 2\pi \text{ だから, } \frac{\pi}{4} \leq 2\theta + \frac{\pi}{4} < \frac{17\pi}{4},$$

$$\text{したがって, } -1 \leq \sin \left(2\theta + \frac{\pi}{4} \right) \leq 1 \text{ だから, } -\frac{1}{\sqrt{2}} \leq XY - Y^2 + \frac{1}{2} \leq \frac{1}{\sqrt{2}}$$

$$\sin \left(2\theta + \frac{\pi}{4} \right) = 1 \text{ のとき, 最大値 } \frac{1}{\sqrt{2}} \quad (\text{答})$$

$$\text{このとき } 2\theta + \frac{\pi}{4} = \frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2} + 2\pi, \text{ したがって } \theta = \frac{\pi}{8}, \frac{9\pi}{8}$$

$$\theta = \frac{\pi}{8} \text{ のとき, } X = \cos \frac{\pi}{8} = \sqrt{\frac{1}{2} \left(1 + \cos \frac{\pi}{4} \right)} = \frac{1}{2} \sqrt{2 + \sqrt{2}} \quad (\text{答})$$

$$Y = \sin \frac{\pi}{8} = \sqrt{\frac{1}{2} \left(1 - \cos \frac{\pi}{4} \right)} = \frac{1}{2} \sqrt{2 - \sqrt{2}} \quad (\text{答})$$

$$\theta = \frac{9\pi}{8} \text{ のとき, } X = \cos \frac{9\pi}{8} = -\cos \frac{\pi}{8} = -\sqrt{\frac{1}{2} \left(1 + \cos \frac{\pi}{4} \right)} = -\frac{1}{2} \sqrt{2 + \sqrt{2}} \quad (\text{答})$$

$$Y = \sin \frac{9\pi}{8} = -\sin \frac{\pi}{8} = -\sqrt{\frac{1}{2} \left(1 - \cos \frac{\pi}{4} \right)} = -\frac{1}{2} \sqrt{2 - \sqrt{2}} \quad (\text{答})$$

$$\sin \left(2\theta + \frac{\pi}{4} \right) = -1 \text{ のとき, 最小値 } -\frac{1}{\sqrt{2}} \quad (\text{答})$$

$$\text{このとき } 2\theta + \frac{\pi}{4} = \frac{3\pi}{2}, \frac{3\pi}{2} + 2\pi, \text{ したがって } \theta = \frac{5\pi}{8}, \frac{13\pi}{8}$$

$$\theta = \frac{5\pi}{8} \text{ のとき, } X = \cos \frac{5\pi}{8} = -\sin \frac{\pi}{8} = -\sqrt{\frac{1}{2} \left(1 - \cos \frac{\pi}{4} \right)} = -\frac{1}{2} \sqrt{2 - \sqrt{2}} \quad (\text{答})$$

$$Y = \sin \frac{5\pi}{8} = \cos \frac{\pi}{8} = \sqrt{\frac{1}{2} \left(1 + \cos \frac{\pi}{4} \right)} = \frac{1}{2} \sqrt{2 + \sqrt{2}} \quad (\text{答})$$

$$\theta = \frac{13\pi}{8} \text{ のとき, } X = \cos \frac{13\pi}{8} = -\cos \frac{5\pi}{8} = \sqrt{\frac{1}{2} \left(1 - \cos \frac{\pi}{4} \right)} = \frac{1}{2} \sqrt{2 - \sqrt{2}} \quad (\text{答})$$

$$Y = \sin \frac{13\pi}{8} = -\sin \frac{5\pi}{8} = -\sqrt{\frac{1}{2} \left(1 + \cos \frac{\pi}{4} \right)} = -\frac{1}{2} \sqrt{2 + \sqrt{2}} \quad (\text{答})$$

(4)

$$6X^2 - 3X + 4Y^2 = 6\cos^2\theta - 3\cos\theta + 4\sin^2\theta = 6\cos^2\theta - 3\cos\theta + 4(1 - \cos^2\theta)$$

$$= 2\cos^2\theta - 3\cos\theta + 4 = 2t^2 - 3t + 4$$

$$\cos\theta = t \text{ とおけば, } 0 \leq \theta < 2\pi \text{ だから, } -1 \leq t \leq 1$$

$$f(t) = 2t^2 - 3t + 4 = 2\left(t - \frac{3}{4}\right)^2 + \frac{23}{8}$$

$$\text{したがって 最大値は } f(-1) = 9, \text{ 最小値は } f\left(\frac{3}{4}\right) = \frac{23}{8} \quad (\text{答})$$

$$\text{最大値をとる } t = -1 \text{ のとき, } \cos\theta = -1 \text{ から } \theta = \pi, \therefore X = -1, Y = \sin\theta = 0 \quad (\text{答})$$

$$\text{最小値をとる } t = \frac{3}{4} \text{ のとき, } \cos\theta = \frac{3}{4}, \therefore X = \frac{3}{4}, Y = \sin\theta = \pm\sqrt{1 - \cos^2\theta} = \pm\frac{\sqrt{7}}{4} \quad (\text{答})$$

< 解説 >

三角関数の基本公式を活用しながら，ていねいに計算すれば良い問題である。

(3)

$\sin \theta$, $\cos \theta$ は 2π を周期とする関数だから， $0 \leq \theta < 2\pi$ の相異なる 2 つの θ において $\sin \theta$, $\cos \theta$ と
も同一の値をとる，ことに注意する。

< 総評 >

① , ② とも理系の問題とほぼ同じだから，文系の問題としては少々手強い。難易度は A - と B +。
③ , ④ は標準レベルの問題で，難易度は B。

200828